

音楽家系の俺が同人 ゲームを作ること になった件について

通りすがりの猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

豊ヶ崎学園に霞ヶ丘 詩羽、澤村・スペンサー・英梨々 と同じくらいの才能を持つ男オリ主がいたら・・・？

こちらの作品はアクマゲームのサブとして時々あげます、なのでおもしろい不定期更新です。それでもよろしければみてやってください！

目次

原作1巻

- | | | | |
|------------------|----|-----------------|----|
| 最初の出会い | 1 | 喧嘩じゃないよ論争だよ | 28 |
| 二人の先輩 え？一人忘れてる？ | 4 | 布教用と観賞用までは買わないね | 32 |
| これだから弾き語りはやめられない | 8 | 霞先生との出会い | 35 |
| 8 | | | |
| ネットの名前は慎重に決めましょう | 12 | | |
| 先輩の家って普通は行かないよな | 16 | | |
| 16 | | | |
| 例え話って難しいよね | 19 | | |
| やはり先輩はテンプレだった | 23 | | |

原作1巻

最初の出会い

突然ではあるが、皆は豊ヶ崎学園といえほどのようなイメージをするだろうか？私立のお金持ち？自由な校風？それとも進学校？

確かにそのイメージは間違っていない。だがあの人達に関わったら君もそのイメージがすぐに破壊されるだろう…。

こちら辺で自己紹介をしておこう。俺の名前は榊原真希さかきばらまさき、豊ヶ崎学園1年生。両親は父がプロの音楽家で母が音楽の先生という音楽の家系に産まれた。だからこそ両親も才能があるに違いないと決めつけ音楽の勉強をさせられた。もしかしたら本当の子供ではないかもしれないと疑えればまだ幾分かマシだったかもしれない。

だが、俺は残念ながら絶対音感の持ち主だ、もう否定はできない。正直音楽は嫌いではないが好きでもない。だが職業にしたいかと言われたら嫌だと胸を張って言える自信しかない。だから俺は実家を飛び出し少し離れた豊ヶ崎に通うことに決めたのだ。

え？親が許さないだろうって？それは案外放任主義な父が許したに違いない…。中学の頃は定期テストで学年10位に入るレベルで頭は良かったからというのもまた1

つの原因かもしれない。

だがまさか音楽の家系のせいであんなことになるとは……。そうだな……。始業式のことから話そうか。

始業式が始まる前の教室で待機時間のときに暇で暇で仕方なかった俺は2年の教室の前の廊下を歩いていた、噂では2年生はやばいときいていたがそんな雰囲気もなく歩いていた。すると前から一人の先輩が歩いてきたので避けようとしたらその先輩が口笛をしていて咄嗟に

「琥珀色のコンチェルト……」

と呟いてしまったのだ、そう！それが原因だったのだ……。

「……！君も『琥珀色のコンチェルト』をやったことがあるのか！しかもこのBGMはクリア後イベント専用……。もしかして通だな？」

「いや、オタクとかじゃなくてそのゲームの音楽の監修したの俺の父なんで……」

「君のお父さんが!?!……とここで名前きいてもいい?！1年生の君がこんなところにいるのはさすがにおかしいよな……。?」

「俺は榊原 真希、暇だったから廊下を歩いていたらこんなことに……。先輩は?」

「俺か?俺は安芸 倫也!この学校の2年だ。そうだ!今日の放課後にこの教室に来てくれないか!?!頼みがあるんだ!」

「わ、わかりました。それじゃあそろそろ教室に戻るので放課後に会いましょう」
「うん！待ってるからな！」

こうして俺の高校生活は始まったのであった。

二人の先輩 え?一人忘れてる?

放課後になって俺は安芸先輩のいる教室に向かった。中から声がきこえたので俺は入っていくことにした。

「失礼します、安芸先輩いますか?」

「お?来てくれたか!」

中にいたのは安芸先輩の他に三人の女性がいた。一人は安芸先輩と話していた金髪ツインテールであるところがない(どこがとは言わない)人でもう一人の方は黒髪ロングであるところがある(どこがとはry)人、最後に存在感が薄い女性がいた。

「えつとく... 安芸先輩、この人達は?」

「紹介するよ!この金髪が澤村・スペンサー・英々梨っていつて俺と同じ同級生。それでこつちの黒髪ロングの人が俺の先輩で三年生の霞ヶ丘 詩羽先輩。最後に印象が薄いのが俺と同じクラスの加藤 恵!よろしくな!」

「いや、なんで呼ばれたかまったくわからないんですがよろしくお願いします」

「そうよ!いきなり何の前触れもなく放課後に呼び出されたと思ったら、こんな表紙だ

けの企画書見せられて、意味不明な演説聞かされて、ついでに理解不能なサークル勧誘されて、あげくのはてには素人を連れてきて、そりゃブチ切れたくもなるわよ」

「いや英々梨、真希は素人なんかじゃない！こいつの苗字は榊原だ。それだけ言えばお前ならわかるよな？」

「…?!?榊原ってあの!?!」

いや、どの榊原さんなんでしょうか…。

「けど、だからといってその息子に才能があるなんて思えないんですけど？それにあんたね、今までみたいに消費型オタでいるうちはまだ見逃せてたけど、なんの取り柄もないくせにいきなりゲーム作ろうとか世間舐めてんの？」

あ、この人達はゲーム作るんですね。初めて知ったんですけど…。ってことは俺はBGM担当になるのかな？最近趣味で始めたバンドに悪影響を及ぼさないといいんだけどな…。

そんなことを考えていたら隣に霞ヶ丘先輩が隣にきて話しかけてきた。

「榊原君？貴方、私と昔どこかで会ったことがあつたかしら？その顔どこかで見た気がして…。」

「それならたぶん父のことじゃないですかね？テレビにもちよくちよく出ているようですし。」

「なるほどそうだったのね、ありがとう」

「いいいえ。霞ヶ丘先輩も安芸先輩に呼ばれて来たんですか?」

「そうよ。とりあえずあの二人をどうにかしないと…」

霞ヶ丘先輩が見ていた先にはまだ安芸先輩と澤村先輩が口論をしている姿があった。

「二人とも落ち着きなさいよ」

「っ…」

「せ、先輩…!」

「まあ今回のことは、残念ながら私も澤村さんの意見に賛成だけどね」

「せ、先輩いゝ」

そうして霞ヶ丘先輩と安芸先輩は二人の世界に入ってしまった。割り込む余地がなかったたので俺は澤村先輩に話を聞きにいった。

「澤村先輩」

「ん?なによ?」

「安芸先輩の企画書はそんなに酷いんですか?」

「あんたもみればわかるわよ、はいこれ」

そう言つて澤村先輩は俺に安芸先輩が作った企画書をみた。そこに書いてあったのは『名前、日付、同人ギャルゲー企画(仮)』の三点のみだった。

「ゲームの企画書なんですよねこれ？」

「あいつ曰くそうらしいわ、貴方がそう思うのも無理はないわ。」

確かに企画書なんてどう頑張ってもこれはいえない。こんなんで大丈夫なのかなと思っただら、

「ねえ！それより貴方のお父さんがあの榊原 みつくに 光國って本当なの!？」

「そ、そうですよ……」

「琥珀色のコンチエルトよかったです！って伝えておいてほしいんだけど……」

「わかりました、父に伝えておきますね」

「ありがとう!……あの二人こっちのこと忘れてるわね、私ちよつと行ってくる!」

そう言って澤村先輩は霞ヶ丘先輩と安芸先輩の二人のやりとりに横から入っていった。

このままでほんとに大丈夫なのかな……。ん？誰か忘れてるような……。気のせいかな!

これだから弾き語りはやめられない

安芸先輩の企画書を見せられて数時間後俺は一人暮らしの家に帰っていつも通りPCを開きつつギターを手にして調整してた。

最近になって二〇二〇動画というものを知り、そこにいくつか弾き語りの動画を出していたらコメントで『生放送してほしい』というものがいくつかあったので本日より生放送なるものをやってみるのだ、ぶっちゃけ緊張しかない。

一応某SNSサイトでも告知はしてあるので来てくれると嬉しいんだがな……。

「ふう……。皆さん！いつも動画みてくれてありがとうございます！MIKASAです！今日はゆっくりしていつてね〜！」

『きたあああああ！』

『楽しみにしてました！』

『oooooooooooo』

『きたー!!!』

うわっ！思った以上に人がみてきててビックリしたわ！とりあえず楽しみますか。

「それじゃあ、最初の曲は最近人気のアニメ『ろくでなしの魔法教師と禁忌魔法学』のO

Pから歌わせてもらいます！」

『今期の神アニメきたか！』

『あれみてるわ！』

『あのOPいいよね〜』

そうして弾き語り生放送を始めて1時間くらいしてたらとんでもないコメントをみてつけてしまった。

『ランキング5位おめ〜！』

『ランキング5位とかやばwww』

『oooooooooooo』

おいおい、なんてこつたい……。こんなつもりじゃなかったんだけどな……。まあ聴いてくれる人が増えるのは嬉しいからいいんだけどな。

side 倫也

詩羽先輩と英梨々からフルボッコにされて家に帰ってきて日課であるネットサーフィンしてたんだが、とんでもない生放送をみつけたかもしれない。名前はMIKAS A っていうのか、めっちゃうまいな……。ん？この声どつかできいたことあるな……。ダメだ、思い出せない！喉までできてるんだけどなんで……。名前にも見覚えはあるん

だよな。出てこないのはしょうがないか。

side out

side 真希

生放送が終わった後にツイッターを確認したら沢山リップがきていてとても嬉しかった。自分の歌声で喜んでももらえるってやっぱいいな！ただ、身バレしないかだけが心配だな、年齢は公表してないけど声でわかる人はわかるだろうからなく。。。。けど今まで動画出しててバレてないし入学したばっかりだから大丈夫だよな！

なんて思ってたのが昨夜のことでした。。。。

「放課後に音楽室借りに行くか。いや、今日は吹奏楽部が使うっていったな、どうするか。。。」

「よお！真希！」

そう言って俺の背中をバシバシ叩いてきたのは同じクラスの町田だった。こいつ確か吹奏楽部だったよな。。。

「なあ、今日は吹奏楽あるんだよな？」

「ん？放課後は普通に部活あるよ」

「やっぱりか」

「なんだ？またギターか？」

「そうなんだよ、最近ちよつとやる気がでてね、けど場所がないならギター持ってきた意味ないな」

と言いながら家から持ってきたギターケースを撫でる

「なら視聴覚室とかどうだ？一応あそこも防音だから先生に言えば借りれると思うぞ？」

まじか！それはいい情報だな！

「ありがと！いまから先生に言いに行くわ！」

「頑張れよ〜」

町田の声をBGMにしながらか俺はダツシユで職員室に向かいに行った。

ネットの名前は慎重に決めましょう

昨日の弾き語りの反響がよかった俺はウキウキで職員室へ向かったが

「視聴覚室の鍵？ほかの人が借りていったぞ、使いたいならそいつに交渉しな」

「わかりました」

知らない人がいるなら別にいいかなとは思いつつも足は視聴覚室へと向かっていた、そしたらどこかせきいたことがある声がきこえてきた。

「やくごめんごめん、教室出たところで勝ち気なクラス委員長に『こら待て掃除当番！』って追いかけられちゃってさ〜」

「・・・なにやってるんですか倫也先輩」

「え？なんでこんなところにいるんだ真希？」

「音楽室が使えなくて視聴覚室で弾こうと思っただんですよ」

「お！まじか！よかつたらきかせてくれないか？」

「・・・いや、俺は別に大丈夫ですけどそこにいる人はほつといていいんですか？」

「あ・・・」

「もう鍵閉めっちゃったから今日のサークル活動はこれでおしまいつてことでいいよね

「？」

「・・・ほんとごめん」

「えっと、加藤先輩でしたっけ？とりあえず視聴覚室使うんで貰ってもいいですか？」

「あ、うん大丈夫だよ。安芸君どうする？この子の演奏きくの？」

「そうだな、せっかくこうしてメンバー全員集まったんだし、今後の進め方ともうちよと話していかないか？」

「全員つてのがちよつと詭弁にきこえるけど・・・そだねちようどいいしね」

「ところで安芸君、後輩君は？」

「・・・もう中入っていったな」

「だれが先輩二人のイチャラブ（？）の会話をきいていなきやいけないんだよ・・・。

「調整終わるまで少し待っててください」

「おう、わかったよ」

「それで安芸君、今後の進め方ってなにか思いついたの？ほかのメンバーの心当たりは？」

「・・・さて、夢も希望も打ち砕かれ万策尽きた週末金曜日、皆様いかがお過ごしでしょうか？」

「まだ一つしか策を弄してないと思うんだけど？」

さて、調整お終わったし弾き始めるか。

「一事が万事ということを考えれば、一策が万策といえなくもない」

一曲目はG○○○n o w s でいいかな。

「理屈っぽいこといつてるように全然辻褄あつてなくないそれ？」

確か最初の入りはF m a j 7からだったっけか、やるか。

「まあとにかくもうちよつと粘り強く・・・ってこれは!？」

「倫也先輩わかるんですか？」

「わかるもくそも涼○○ハル○○の憂鬱の代表曲じゃないか！」

「へえ、安芸君、それって有名なの？」

「名作中の名作だぞ！」

「渴いた心で駆け抜ける」

「真希君だっけ？上手だね」

「・・・確かにうまいんだけどこの声どこかで・・・」

「どっかできいたことあるの？」

「そのはずなんだけどなく・・・」

そろそろサビか、G、Em、Am、Dmと

「思い出した！この声MIKASSAか！」

「MIKASA・・・?誰なの?」

「MIKASAとはある動画掲載コンテンツで弾き語りの動画を出していてここ最近で一気に伸びてきた人だよ。それにプライベートがTwitterですら完全に非公開で素性が未だにわかっていなかったんだよ、わかっていたのは男性であるというただそれだけで声も若干ほかの男性よりも高いせいで一部からは女性なんじゃないかって言われてんだ。それなのにその正体がまさか真希だったなんて・・・。いつもきいてます!これからも頑張ってください!」

なんかちよつと照れくさいけど一応否定くらいしておくか。

「倫也先輩、俺はそのMIKASAって人じゃないですよ」

そういいながら手元ではちゃんと弾いているので沈黙にはならない。

「・・・なんだ、そうなのか」

あれ?あつさり信じちゃったよこの人。もしかして案外チョロい先輩なのかもしれないな、なんて考えてたら

「安芸君、MIKASAって並び替えたらMASAKIになるよ?」

「・・・ごめんなさい、嘘つきました」

今後、加藤先輩の前で嘘を吐くのはやめよう、見破られる気しかない。ってかこんな簡単なアナグラムにするんじゃないかな・・・

先輩の家って普通は行かないよな

結局、あの後俺を除く二人で今後のことを話していた。え？俺はなにしていたか？ただひたすらアニソンとポカロを弾いてました。そして話の流れでどうやら俺と加藤先輩は明日の土曜日に倫也先輩の家に行くことになった。どうしてこうなったかって？安心してくれ、俺もどうしてかわからん。

翌日、とりあえず集合場所と言われたところに10分前に着いた。

「お、もう来てたか真希」

「あ、おはようございませぬ倫也先輩」

「それにしてもはやいな？」

「そうですか？10分前行動は当たり前かと・・・」

「これであとは加藤だけだな」

ちなみにだが本日は楽器をもってきていない、邪魔になると判断したからだ。

「・・・今更だけど、なし崩しで真希も参加させちゃったが大丈夫か？」

「ほんとに今更ですね倫也先輩、ここまできたらやりますよ。それにここまで学生生活が大変ってわけでもありませんし」

「そうか、ありがとな」

「けど一度やるってきめたからには全力でやりますよ？問題ないですよね？」

「ああ、まったく問題ない。これから頼むぞ！」

「わかりました」

そんなこんなで集合時間を3分遅れたところで加藤先輩がやってきた。

「お待たせ〜」

「大丈夫ですよ加藤先輩」

「・・・よう」

「晴れててよかったよね〜今日。予報ちよつと微妙だったから心配してたんだ」

「降水確率も低いってわけではなかったからですからね・・・」

ふと隣をみると倫也先輩が考え込みながら歩いていた、大方女子を家に連れて行くのが初めてとかなのだらう。いや、俺も家に上げたことなんて生まれて一度もないが・・・

そうこうしているうちに倫也先輩の家に着いた、どうやらこの辺の近くの坂で倫也先輩と加藤先輩が初めて出逢ったらしい。

「ま、散らかってるけど適当に座ってくれ」

「お邪魔します」

「改めてお邪魔しま〜・・・うわあ絵に描いたオタク部屋だね」

確かに言われてみればポスターやフィギアやラノベがたくさんある。こんなたくさん買ってさぞかしアルバイトも大変だったんだろうな．．．なんて考えながらそこらへんで寛ぐことにした。

「それで倫也先輩、なんで集まったんですか？」

そう、今現在ここにいるメンバーでなにをするのかは俺はまったく知らされていない。無知なのが悪いんじゃない、しっかりと伝えなかつた倫也先輩が悪い。この問いを無視して加藤先輩は勝手に話を進めた。

「とりあえずメンバー集めようつてのはいいいよ。ゲーム作るのにはたくさんの人が必要だつてのは流石に私でもわかるし。実際に榊原君の加入には私も反対しないし」

「PCギャルゲーならそんなでもないけどな、商業でも小さいところは二〜三人で作っているところもあるし」

「?けどだからといって少人数よりかは大人数のほうがいいんじゃないですか?」

「確かにうちは商業ではなくただの個人サークルなわけでギヤラも発生しないから大人数でもいいかもしれない、けど何分俺の人脈がないから仕方ないんだ．．．」

学校でも有名な人の澤村先輩に霞ヶ丘先輩と知り合いで人脈がないというのは些か疑問ではあるがまあいいだろう。初めてギャルゲーをする加藤先輩に倫也先輩がちよくちよく突っ込みながらも話は進んでいく。

例え話って難しいよね

加藤先輩がギャルゲーを始めて数時間が経ち現在の時刻は19:00、どうやら倫也先輩のルールでBAD ENDはノーカウントでもう一回やれという謎が……いや、それに応える加藤先輩もどうかと……。俺？一人暮らしたから門限もくでもないから大丈夫。さてそれまで俺はただひたすらラノベを読んでいた。決して甘い^{倫也先輩と加藤先輩}雰囲気(?)の間に入れなかったというわけではないと俺の名誉の為と言っておこう。

「そつちじゃないよ、澤村さんのことだよ」

……どうやら澤村先輩の話をしているようだ。

「この前、あんなに思いつきり断られたんだし、もう二度と話をきいてくれないんじゃないかな？」

確かにあんな断られ方をされたらもう無理なんじゃ……。

「まあ、向こうはそのつもりかもな。携帯も着信拒否されてるし」

……ん？着信拒否？つまりそれなりの仲ではやっぱりあるんですね。

「だからまあ、布石を打った。あとは待つしかない」

「つまり倫也先輩にはなんかしらの方法で澤村先輩と直接会話をする方法があり、言い

方的にもうまもなくそのタイミングが来る為の策があるってことですか？」

「そういうこと、例えば萌え豚に『ヒロインの可愛さに萌え死ぬ！』って薦めたゲームが実は『可愛い萌えヒロインが死ぬ』鬱ゲーだったら怒るだろ？」

「ごめん（なさい）、言ってる意味がよくわかんない（わかりません）」

「二人揃ってそんなこと言うか・・・、じゃあ例えばシナリオ厨に『これ絶対泣けるから！』って薦めたゲームが、実はバグだらけで正常に作動しなくて逆の意味で泣けるゲームだったらキレるだろ？」

ああ、それならわからなくはないけど加藤先輩が全くわかってない顔をしている。先の二つの例でわからなかった人の為（読者）にわかりやすくいうと『これいいよと薦めて実はまったくよくなかったオチ』といえればわかりやすいだろう。

「・・・その例えもわかりにくいよ榊原君」

ちよっ・・・なんでさらっと人の気持ち（地分）に突っ込んでこれたんですか・・・？不思議で仕方ないんですが。

「そんなこと（メタ）はおいといてここからが本題なんだが・・・同じように、ホラー嫌いやつに騙してホラー作品を貸したら怒るだろ？」

「本題が一番わかりやすいってどうなの（なんですか）？」

「で、そんな仕打ちを受けたら、貸したやつに一言言わなきゃ気が済まないだろ？」

「いや、そうですか？」

「済まないんだよ！特にオタクは！」

「それで、わざわざ長い例え話（行）だしたつてことは澤村先輩もそれに当てはまるつてことですか？」

「そういうことだ」

「ていとか気になつてたけどさ、安芸君つて澤村さんのこと詳しいよね？」

「・・・どうしてそう思う？」

「だつてほら、本名とか家族のこととか、昔のこととか・・・考えすぎ？」

加藤先輩、たぶん考えすぎじゃないと思いますよ。

「考えすぎついでに、もう一つだけ教えておこうか」

そうして倫也先輩は西窓のほうに行き正面を指した。

「あいつの家が金持ちだつて言つたよな」

「それは噂でできたことあります」

「それも本当だ、ここからでつかい屋敷がみえるだろ？」

「まさか・・・」

「そのまさかだ、あれが澤村邸」

「あ、あそこからなんか光がみえますよ？」

やはり先輩はテンプレだった

「と、倫也、あんた．．．つ、あたしがホラー超苦手なの知っててえ！」

うわ．．．それはひどいですね倫也先輩．．．。

「ん？『これはゾンビですか？』はい、ジョージ・A・ロメロの名作です』は気に入らなかつたか？」

やべえ、タイトルだけでめっちゃ気になる。それから自分が仕組んだ罠をどや顔で話す倫也先輩とそれに文句を言う澤村先輩の姿がしばらく続いた。にしても噂の澤村先輩がこんなにも倫也先輩好きの前だと変わるなんてまたとんでもない光景をみてしまったのではないのだろうか．．．。

さて、倫也先輩の部屋に居たのが倫也先輩だけじゃないと知ると俺と加藤先輩を思いつきり睨んできた。

「えつと．．．澤村先輩、そんなに倫也先輩と二人きりになれなかつたのが許せないんですか？ごめんなさい、今から帰るんでもう睨まないでください」

「あー、真希。そいつ超近眼なんだ。学校じゃコンタクトだけだ」

「あ、そうなんですか。で前者については触れないほうがいいんですか？」

「あ、ああ……頼むよ。英梨々がもう顔を真っ赤にしてるから触れないでもらえると助かる」

テンプレツンデレなんて初めて見たぞ……。ほんとにこんな人が世の中にいるんだな。

「さて、説明して……。もらわなくてもいいか別に」

もう立ち直ったのか、案外早いんだな。

「要するに、倫也の、周りが見えてない自分本位の視野狭窄な欲望から生まれたばかりのかがえたさいきょうの思いつきな愚策にまたつき合わされたってことね」

「いやあ、今日のうちに俺のメッセージを受け取ってもらえてよかった。このままお前が来なかったら今晚加藤を泊めなきゃならなかったぞ」

……。俺は帰ってことですかね？うわあ倫也先輩、俺は悲しいよ。

「ちよつと、それだったら榊原はどうするのよ!？」

「……? 帰ってもらうつもりだったがなんで英梨々が気にするんだ？」

「き、気にしてないわよ! ちよつと思っただけ!」

「あ、いや俺は普通に帰るんで気にしてもらわなくても大丈夫ですよ?」

「いえ、もう夜も遅いしなんならうちに来こない? どうせなら生演奏をききたいし」

「え? つていうかそれつて澤村先輩が今日きてなかったらの話なんですよね? なんで

俺が澤村先輩の家で泊まることになってるんですか？」

「……じゃあもし今日あたしが倫也の家に来てなかったらうちにきて演奏してくれたの？」

「いや、まさか。帰りますよ」

「結局帰るんじゃない」

当たり前だ、なんでいきなり先輩の、しかも女性の家に泊まらなきゃいけないんだ。心の準備とかつてもんが……じゃなくて！

「倫也先輩と加藤先輩何してるんですか？」

「ん？ああ、加藤に英梨々の過去絵をみせてるんだ」

いや、だからってそれを本人の前でやるなんてなんて所業……。

「澤村さん、こんな萌え絵も描くんだ……」

まあ確かに見た目と中身が一致してないよな……。

「つていうか本当にオタクだったんだ」

それは思った、ここまでデープだとは思わなかった。

「覚えてなさいよ倫也……」

「いや、だって実物みせないと絶対信じてくれないし」

確かに、実物みないとなかなか信じられないよな。

・・・。それで俺はもう帰っていいんじゃないか？なにかすることあるの？

「これでわかったら加藤に真希？この、学校ではお嬢様の振りしつつも裏では思いつきり同人に手を染め人気ジャンルに寄生しつつ荒稼ぎしてるオタク女が俺たちのギャルゲー制作にとつてどれだけ必要なのかが！」

「・・・確かにわかりましたけどどうやら本人は乗り気じゃないようですよ？」

「あたしやつぱ帰る、てか死ぬ」

「いや、絶対仲間になつてもらおうぞ英梨々！お前のその卓越したデザイン能力と、流行りの絵柄にすぐ追隨できる起用さがあれば、この大して特徴のない加藤でさえも超絶萌えキャラに・・・」

それつて澤村先輩のレベルの画力がないと加藤先輩が萌えないつてことじゃ・・・。倫也先輩つてたまにとんでもない発言するよな・・・。つてかそれならモデルを加藤先輩じゃない人にすれば別に澤村先輩にキャラデザを頼まなくても・・・。だがこの議論はすでに始まっていたようで、

「それ、モデルなしでオリキャラ起こしたほうがハードル低いんじゃないの？」

「いや、それは困る。何しろ加藤あつての企画だし」

「まああたしはやる気ないからどうでもいいけど」

「いや、それも困る。何しろ英梨々がいないと成り立たない企画だし。」

「えっと、一応きいときますけど俺っていりますか？」

「当たり前だ、真希もいなきや困る。何しろ真希がいなにと成り立たない企画だし。」

あ、一応いるんですね。ならいいかな暇つぶしにもなるし、ただそしたら連絡くらいは入れておいたほうがいいかな？

「それってどんだけ脆弱な企画なのよ。例え初代スタッフが全員抜けてブランド名と権利しか残ってなくてもしれつと続編がでる某タイトルをみないなさいよ」

それって【自主規制】じゃ……。これ以上はいつてはいけない。詳しくは各自で調べるように。いいね？

「やめろ！そういうブランドのこと『俺は』尊敬してるけどそれとこれとは話が別だろ！」

とそんな話をしてたら突然、

「きゃああああっ?!」

加藤先輩が悲鳴をあげたのだ。

喧嘩じゃないよ論争だよ

「どうやら加藤先輩は『18歳以上ですか?』のボタンで『ハイ』を押しただけ言つとくぞ。」

「あ、あ、あへっ．．．さ、澤村さん、これはっ」

「ちょうど俺の座つてる位置からは画面がみえないのでどのような画像が映っているかは読者の皆様のご想像にお任せするでしょう．．．俺はさっきから誰に説明してるんだ?」

「そういうことはいちいち聞かないのがマナーつてもものじゃないのかしら加藤さん?」

「さて、興味が無い俺は倫也先輩に許可を借りて少し弾こうかと思つたが持つてきていないことを思い出し立ち上がってまた座るといふ奇妙な行爲をした。その時に、」

「なんで立ちあがつたのよ」

「いや、楽器持つてきてないの思い出して．．．」

「なんてやり取りがあつたのは内緒だ。どうやら話をきいてると澤村先輩のサークルはとても人気があるということがわかつた、けれど運営をしているのはお父さんらし

い。まあ確かに未成年が18禁サイトを運営するのはあまりよくないな、にしても両親がオタクで金があるつてもうチートだよな。それに容姿はいいし……。あれ？もしかして澤村先輩つてオタク視点からみても人気なんじゃないか？なんてどうでもいいこと考えてたら倫也先輩と澤村先輩の論争はまだ続いていた……。仲良しすぎかよ。

「情熱がなきややつてやれられないだろ！」

「続けられるわよ？」

「せつかく熱く語ってるんだからちつとは怯めよ！」

「むしろそういう商売つ気全開の作家さんこそコンスタントにたくさんのイベントに出稼ぐわよ？よく隣り合わせになる某サークルなんかもう……」

「やめてやめて消費型オタの夢を壊すのやめて！」

「いや、倫也先輩も消費型オタから搾取する生産側にまわるんじゃ……。？」

「榊原の言う通りよ倫也、そんな甘つちよろい夢を抱えたままじゃやっていけないわよ？」

「違うもん俺は商売じゃないもん表現の自由だもん！」

「……？なんか矛盾してないか？」

「倫也先輩、お言葉を返すようですがそれつて加藤先輩メイシヒロインが売れなくてもいいつてことですか？世間に認知されなくてもいいつてことですか？所詮自己満足の行き域だったつ

てことですか?どうなんですか?」

「・・・真希、お前なにちゃっかりそっち側《英梨々サイド》にまわってんだよ・・・」
「二人の意見をきいていたら俺が賛同できたのは澤村先輩だったので、それに女の子の味方はするものでしょ?なんで男子二人で女の子を論破しなきゃいけないんですか大人げない」

「う、裏切りもの〜!」

「あ、あの、三人とも喧嘩は・・・」

「あなたは黙ってなさい」

「加藤、今は口を挟まないでおとなしくゲームの続きやつててくれ、な?」

まだ加藤先輩クリアしてなかったんですね・・・。

「とりあえず酷くなったら俺がちゃんと仲裁するんで加藤先輩は安心しててください」

「えっと、私なんでここに呼ばれたの・・・?」

「・・・大丈夫です加藤先輩、それは俺もですから」

さてここからの論争は正直俺が入るにはあまりにも戦力が低かったのでへたに入るよりかはひたすらききに徹していた。詳しく知りたい人は『冴えない彼女の育て方』というラノベの143ページ以降を参照してくれ。

さて結局加藤先輩がしていたゲームに見入った二人の先輩はクライマックスに入り

終わった後には泣いていたらしい。というのも俺は途中で寝てしまったからだ、なにせ二人の論争はあの後数時間に渡ったのだ。眠くなるなというほうが無理だろう。

さて現在の時刻であるが・・・

「あ、外が明るくなってる」

この加藤先輩の一言で想像してほしい・・・。俺は倫也先輩に起こされた、本日が日曜であることに感謝しかない。月曜だと考えただけでゾツとする。

布教用と観賞用までは買わないね

さて、流れで倫也先輩の家で泊まった土曜日から1週間後。え？1週間ながあつたか説明しろって？なんもなかつたよ、普通に学校行って家で勉強して暇つぶしにギター弾いてときたま生放送をしての繰り返しだったから語ることもなんて特になんだよ。

さて、本日は何故か倫也先輩と加藤先輩と遠出することになった、ほんとは和合市の霞先生のサイン会に行きたかったんだよな……。

「おはようございませう倫也先輩に加藤先輩」

「おはよ……ふあああああ〜」

「おはよう二人とも、それじゃあ切符買いにいこうか」

「?どこまで買うの安芸君?」

「和合市」

ん?まさか……?!

「つて、隣の県じゃない。うわ切符たつか」

「遠出するって言ったろ昨日」

「倫也先輩、もしかして今日行くのつてとある作家さんのサイン会ですか……?」

「つつ！まさか真希！」

「この瞬間倫也先輩と分かり合えた気がする。」

「俺、霞先生の大ファンなんですよ！」

「じゃあもちろん『恋するメトロノーム』は……？」

「もちろん！何回読んでも新しい発見があるのでいつも常備して暇なときに呼んでますよ！」

「おお……!!」

「それって昨日安芸君が渡してくれた本のこと……？」

「あ、そうですよ加藤先輩。ってか倫也先輩もう布教してたんですね」

「もちろん！それで加藤感想は……？」

「ラノベって完全男の子向けかと思ってたけど、女の子が読んでも泣ける作品だよ、これ」

「だよな！やっぱ泣けるよな！」

「さすがわかってますね加藤先輩！」

「この間のギャルゲーもそうだったけど、食わず嫌いってよくないなあて……まあ、もうちよつと表紙とか手に取りやすいものにしてくれたら助かるけど……」

「か、加藤っ、お前ってやつは、やっぱり……」

まさか食わず嫌いはよくないって言葉がオタクじゃない人からでてくるとは、さすが霞先生といったところか。

「だから悪いんだけど、返すのゴールデンウィーク明けでいいかな？もう一度、今度はゆっくり読んでみたいなって思っちゃって」

「こ、ここまで影響を及ぼすのか。これは霞先生様様だな。今日あつたら感謝しよう……心の中で。」

「いいっていいって！というか別に返さなくてもいいから。どうせ加藤に渡したのは布教用だし、読書用と保存用にあと2セット持つてるから」

「そ、そう？まあ、また買う必要ないならありがたくもらっちゃおうかな？」

「違うんだ加藤先輩、このひとはそんなじや終わらないんだよ。」

「いやもちろん買うぞ？布教用が減ったら当然だろ？」

「そ、そう……ありがとう」

霞先生との出会い

さて、電車の中で熱く語っていたらいつのまにか着いてしまった和合市聖地、そこから各地を周りついに今回の本命である帖文堂書店の三階イベントフロアの行列に並んでいた。

「なあんだ、サイン会があるならちゃんとそういつてよ」

「そうだよ倫也先輩、サイン会っていつてくれればそれなりに持ってきたのに」

「いや、マジで加藤がそこまでハマってくれるとは思わなかったし、まさか真希が『恋するメトロノーム』のファンだとは思わなかったから断られるかと・・・」

「だからつて拉致紛いの行動しなくても・・・」

「そうだよ安芸君、『だから目的も言わずに連れ出してしまえ』ってどういう倫理？」

「ねえ！実は二人とても仲がいいんでしょ!？」

「そんなことないよ（です）」

「ほら！息ピッタリじゃん！」

「ま、まあ倫也先輩それはとりあえず置いてよく整理券3枚も取れましたね？」

「まあ三人分の電車賃と昼飯代に往復三時間かかったしな」

「わざわざすみません」

「ありがとうね安芸君」

「いや、別にこれくらいなんともないよ」

「それでさこの霞詩子先生ってどんな人？榊原君知ってる？」

「聞いた話によると女の人の人らしいですよ？ただネットで検索しても一番上に出てきたサイトが個人ブログだったんでなんともいえませんよ、倫也先輩は知ってますか？」

「あ、ああ・・・前にも二巻発売の時にここでサイン会があつてな」

「それで？それで？」

「・・・会つたらすぐにわかるからそれまでのお楽しみつてことで」

「倫也先輩のケチ〜！」

「そろそろ始まるよ二人とも」

「本当ですね、いや〜楽しみだな〜」

五分ほどの説明が終わった後拍手と共に霞先生がでてきた。

「・・・全然見えないよ安芸君」

「確かに俺の身長でギリギリです175cmね・・・」

「・・・大丈夫だ、サイン貰うときに直接対面できる」

「あれ？倫也先輩？あの人多つかでみたことあります！誰でしたっけ？」

「あと少しだから我慢しろ真希」

そうしてついに霞先生と対面した。

「・・・倫理君？」

「「え？」」

「ども、ここでは久しぶりです・・・それと、何度も言うけどその渾名やめて」

「霞ヶ丘・・・先輩？」

「いや、霞詩子先生・・・ここではな」

まさかあの霞ヶ丘先輩が霞先生だったなんて・・・。だが俺は言わなければいけないことがあるんだ！

「霞先生！いつも楽しく読ませてもらってます！サインください！」

「え、ええ。構わないわ」

「じゃあ改めて、こちらが三年C組霞ヶ丘歌羽先輩。あと、ペンネーム霞詩子先生」

「でこつちが二年B組加藤恵」

「それと一年A組榊原真希」

そうして倫也先輩は俺たちの紹介を始めたと思ったら

「それじゃあ、これで紹介も済んだことだし、後はざつくばらんに・・・」

「「・・・・・・・・」」

「を〜い」

「はあ・・・倫也先輩の周りってほんとにやばいんですね、なんでこんな人たちがばかりなんですか?」

「榊原君、それあたしのセリフね。そのやばい人の中に榊原君も入ってるからね?」

「・・・・・・・・え?まじですか?」

「うん、マジ」

「いや、そこに真希が入ってたとしてもなんの特徴もない加藤がいるからキチンとバランスとれてるじゃん」

「・・・・・・・・そういう問題じゃないですよね?」

「そうだよ安芸君、こんなすごい人たちを使って同人ゲーム作ろうとか言ったの?それって逆の意味で無茶だよ」

「けど俺、他に絵や文章書けそうな知り合い他にいないし」

「それ自分が何言ってるかわかってますか倫也先輩?」

「そうだよ、武器が核ミサイル二発しかない軍隊みたいだよ」

「けどその二発で敵を全滅させらんほおほおほおほ!?」

「……いつまでいちゃついているのよ。昔の女の前で」

「……倫也先輩?」

「いちゃついていると思うならそういう誤解を招く行為はやめて!あとそういう迂闊な出鱈目いうのもやめて!真希が勘違いしてるから!」

「ていうか、こんなところまで何しに来たの倫理君?今の彼女をそんなに見せつけないわけ?」

「だからあ、あんたこの街じゃ結構有名人なんだから」

「大丈夫よ、誰も気にしてないから」

そうして倫也先輩と霞ヶ丘先輩のやりとりをきき流しながら俺はサインを眺めていた。途中から加藤先輩も混じっておれが空気だったのはここだけの話な?